

極早生温州「肥のあかり」の芽かきによる着果安定効果

「肥のあかり」は、開花期に自己摘心していない長めの春梢を芽かきすることで、一次落果期の落果が特に少なくなり、着果率が向上し着果数が増加する。収穫時の単位容積当たり収量、個数は無処理に比べ増加し、果実品質はやや良好となる。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室(担当者:北園邦弥)

研究のねらい

極早生温州「肥のあかり」は、珠心胚実生系品種であり、結果初期においては樹勢が強く新梢伸長が旺盛である。このため、新梢の発生が多く新葉率が高い場合には、着花がみられても新葉との養分競合により生理落果が助長されて着果不足となりやすい。

そこで、開花期に長めの新梢を芽かきすることによる着果安定効果を明らかにする。

研究成果

1. 「肥のあかり」は、開花期に自己摘心していない長めの新梢を芽かきすることで新葉率は低下し、着果率が向上し着果数も増加する(表1、図1、図2)。特に、芽かきによって一次落果期(5月)の落果が少なくなる。
2. 収穫時の着果数は、単位容積当たりで無処理の32%増となり、収量では34%増となる(図3、図4)。
3. 芽かきによって糖度、糖酸比がやや高く、果実品質は向上する(表2)。

普及上の留意点

1. 本成果は、結果開始3年目の樹を供試樹とし、シートマルチを6月下旬から行った時の結果である。
2. 本試験では、新梢の芽かきは平成18年5月10日(満開期)に実施した。なお、樹勢が旺盛な場合には、開花期後にも遅れて徒長ぎみの新梢が発生しやすいことから、5月中下旬にも芽かきを実施する。

表1 樹容積と芽かき実施前後の新葉率

処理区	樹幅	樹高	樹冠容積	芽かき前新葉率	芽かき本数	芽かき後新葉率	芽かきした新梢の平均葉数
	m	m	m ³	%	本	%	枚
芽かき	1.9	1.8	4.3	62.3	65.3	52.3	10.6
無処理	2.0	1.7	4.8	65.5	-	65.5	-

注) 芽かき本数は1樹当たり(H18.5.10実施)

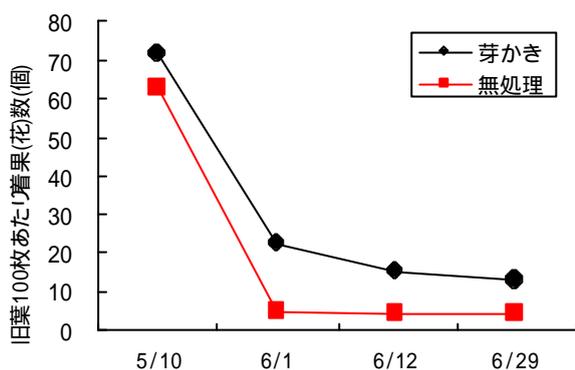


図1 '肥のあかり'の芽かきによる着果数(花数)の推移

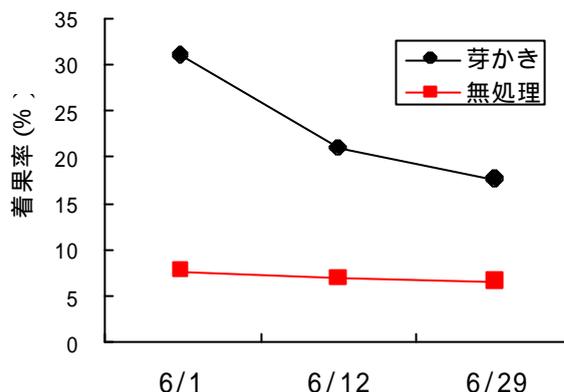


図2 '肥のあかり'の芽かきによる着果率の推移

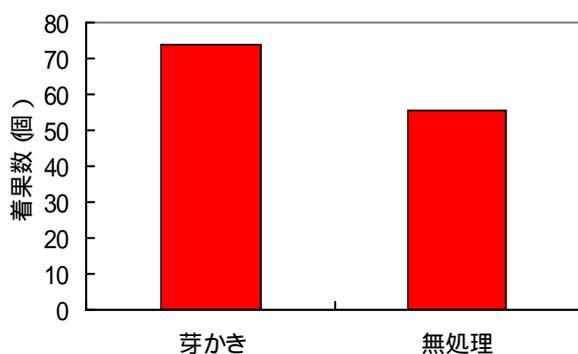


図3 '肥のあかり'の芽かきが1m³当たり着果数に及ぼす影響(H18.10.3)

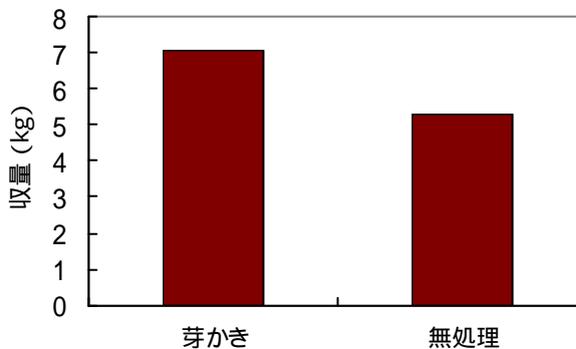


図4 '肥のあかり'の芽かきが1m³当たり収量に及ぼす影響(H18.10.3)

表2 芽かきが「肥のあかり」の果実品質に及ぼす影響(H19.9.29)

処理区	1果重(g)	果肉歩合(%)	糖度(Brix)	クエン酸(g/100ml)	糖酸比
芽かき	101.7	80.9	11.0	0.83	13.3
無処理	103.7	79.6	10.7	0.86	12.5